

四国横断自動車道（南国～伊野）建設に伴う

平成7年度 奥谷南遺跡発掘調査概報



1996.3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

四国横断自動車道（南国～伊野）建設に伴う

平成 7 年 度
奥谷南遺跡発掘調査概報

1996.3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



平成7年度調査地点遠景



Ⅶ区全景



窯焼成部遺物出土状況



窯火床断ち割り状況

例 言

1. 本書は四国横断自動車道建設に伴い平成7年度に実施した奥谷南遺跡の発掘調査の概要を記録したものである。

2. 本調査は日本道路公団高松建設局の依頼を受け、高知県教育委員会が受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが調査を実施した。

3. 奥谷南遺跡は高知県南国市岡豊町小蓮に所在する。発掘調査は平成7年12月20日から平成8年3月27日まで実施した。

4. 発掘調査は次の体制で行い、本書の執筆・編集は松村が行った。

総括・・・・財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 原雅彦

総務・・・・同総務課長 田岡英雄・同主幹 吉岡利一

調査担当・・・・同主任調査員 松村信博・山崎正明 同測量補助員 山本純代

5. 出土遺物等の資料は、高知県文化財団埋蔵文化財センターにおいて保管し現在整理中である。

6. 発掘調査に参加したのは以下のメンバーである。(平成7年度)

(発掘調査) 井上速男・井上郁雄・石川功・植田純子・小松栄一・小松好・小松木義・小松浜子・小松重喜・小松光尾・浜口興・森本幸栄・森本倫代

(整理作業) 岩貞泰代・楠瀬憲子・小松経子・竹村延子・松木富子・宮本幸子・矢野雅・山本裕美子

また調査に際して、測量作業等で高知県埋蔵文化財センターの池澤俊幸・竹村三菜・武吉眞裕・出原恵三・藤方正治・前田光雄・松田直則・山本哲也の各調査員、高知市教育委員会の田上浩氏の協力を得た。

7. 浅野晴樹(埼玉県埋蔵文化財調査事業団)・岡本健児(高知県文化財保護審議会委員)・岡本桂典(高知県歴史民俗資料館)・片桐孝浩(香川県埋蔵文化財センター)・倉田芳郎(駒沢大学教授)・中島恒次郎(太宰府市教育委員会)・橋本久和(高槻市教育委員会)・百瀬正恒(京都市埋蔵文化財研究所)・森隆(富山県文化振興事業団)・吉村正親(京都市埋蔵文化財研究所)の各氏及び高知県埋蔵文化財センターの面々には調査に際して貴重なご助言を頂いた。記して謝したい。

本文目次

第Ⅰ章	調査に至る経過	1
第Ⅱ章	地理的歴史的環境	3
	地理的歴史的環境	
	周辺の遺跡地区	
第Ⅲ章	遺跡の概要及び平成6年度の調査	6
	遺跡の概要	
	調査区の設定	
	平成6年度調査の概要	
第Ⅳ章	平成7年度・調査の概要	12
	調査の方法	
	出土遺物・検出遺構	
第Ⅴ章	平成7年度・調査の成果	15
	Ⅶ区 (1) 山岳寺院関連遺構	
	(2) ロストル構造を持つ須恵器窯	
	(3) 出土遺物に関する若干の補足	
	V区 (1) 縄文時代の岩陰遺跡	
	(2) 旧石器時代の遺物を確認	

図版目次

第1図	奥谷南遺跡位置図及び周辺の遺跡	5
第2図	奥谷南遺跡調査区位置図	7
第3図	山岳寺院関連遺構面	14
第4図	Ⅶ区遺構配置図	15
第5図	斜面北端セクション及び中央バンク北壁セクション	15
第6図	Ⅶ区出土遺物(瓦)	16
第7図	SK-17平面図・断面図及び出土遺物	17
第8図	Ⅶ区斜面包含層(Ⅲ層)出土遺物	17
第9図	窯跡周辺遺構(S=1/100)	19
第10図	灰原出土遺物	20
第11図	窯体実測図(S=1/40)	21
第12図	Ⅶ区包含層(Ⅲ層)出土遺物	22
第13図	山岳寺院関連遺構面出土遺物	22
第14図	窯跡(焼成部)出土遺物	23
第15図	V区出土遺物	26

表目次

表1	平成7年度事業	2
表2	周辺の遺跡地名表	4

写真目次

巻頭カラー

1. 平成7年度調査地点遠景
Ⅶ区全景
2. 窯焼成部遺物出土状況
窯火床断ち割り状況
- 写真1 奥谷南遺跡全景
- 写真2 奥谷南遺跡航空写真
- 写真3 縄文中期末貯蔵穴群
- 写真4 縄文土器出土状況
- 写真5 貯蔵穴
- 写真6 高地性集落
- 写真7 竪穴式石室墓
- 写真8 土坑墓
- 写真9 儒墓・甕棺出土状況
- 写真10 甕棺（唐津焼・甕と鉢）
- 写真11 I区弥生中期末住居跡
- 写真12 I区調査風景
- 写真13 II区土坑墓群
- 写真14 II区遠景（後方の尾根が長畝古墳群）
- 写真15 III区貯蔵穴調査風景
- 写真16 II区尾根上よりI・III区をのぞむ
- 写真17 IV・V区遠景
- 写真18 VI区陰刻花文緑釉陶器出土状況

- 写真19 山岳寺院遺構面調査風景
- 写真20 遺物出土状況(須恵器埋甕)
- 写真21 遺構検出状況
- 写真22 近世遺構面
- 写真23 旧石器時代遺物出土地点
- 写真24 土師器焼成土坑（S K-17）
- 写真25 須恵器窯
- 写真26 須恵器窯周辺遺構
- 写真27 土師器焼成土坑（S K-11）
- 写真28 山岳寺院関連遺構（南から）
- 写真29 遺構面から平野部をのぞむ
- 写真30 斜面部の通路状遺構
- 写真31 山岳寺院関連遺構面遺物出土状況
- 写真32 斜面部調査風景
- 写真33 窯焼成部検出状況
- 写真34 窯焼成部調査風景
- 写真35 窯焼成部測量風景
- 写真36 窯周辺遺構

- 写真37 窯焼成部完掘状況
- 写真38 窯焼成部遺物出土状況
- 写真39 斜面より平野部をのぞむ
- 写真40 窯全景
- 写真41 窯周辺遺構（西より）
- 写真42 窯周辺遺構（上方より）
- 写真43 窯断ち割り状況（横方向）
- 写真44 窯断ち割り状況（正面）
- 写真45 ロストル構造を持つ須恵器窯(完掘)
- 写真46 調査前遠景
- 写真47 1号岩陰(現存しない岩陰)調査風景
- 写真48 近世遺構面
- 写真49 現存する巨岩（2号岩陰）
- 写真50 近世遺構面と1号岩陰（東から）
- 写真51 落盤による岩石群（チャート）

第 I 章 調査に至る経過

昭和62年の南国～大豊間、平成4年の大豊～川之江間開通以来、四国横断自動車道が高知県に与えた影響には計り知れないものがある。高速かつ大量輸送手段として、期待されていた以上の経済効果をもたらし、瀬戸大橋（本州四国架橋）の開通とも相乗効果を生み出した。四国内の他都市のみならず、岡山をはじめとする中国圏、近畿圏との時間距離の短縮には目を見張るものがある。高知県内の四国横断自動車道は、南国～伊野間の平成9年度開通、伊野～須崎間の平成14年度開通を目指して現在急ピッチで設計協議・建設作業が進行中である。

この四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業であるが、南国～大豊間においては飼古屋岩陰遺跡（縄文早期・弥生・古墳―香美郡土佐山田町・昭和57年度）、口ミノヲ谷古墳（後期古墳―南国市・昭和58年度）の2遺跡について実施された。道路が山岳部を通り、多くの区間でトンネル工法を使用するということもあり、遺跡数は比較的少なかったが、南国インター以西の道路



写真1 奥谷南遺跡全景

予定地は山地と平野部の境界あるいは平野部に位置するため、それに伴って調査の対象となる遺跡数も増加してきた。南国～伊野間（10次区間）については、平成4年度の南国市栄工田遺跡の確認調査を皮切りに、平成5年度7件・6年度6件の事業（試掘調査・本発掘調査・整理作業）が実施されている。

平成7年度については、四国横断自動車道関連で8件の事業が行われた。表1のとおりである。伊野～須崎間（11次区間）についても高知県教育委員会と日本道路公団高松建設局高知工事事務所との協議の結果を受けて、本年度から埋蔵文化財調査が本格的に始動した。本年度分は試掘調査3件、本発掘調査1件である。

奥谷南遺跡は、平成5年度の試掘調査の結果を受けて平成6年度に本発掘調査が実施された。従来、縄文時代の遺物散布地として知られていたのだが、調査の結果、縄文中期の堅果類貯蔵穴・弥生中期の高地性集落・弥生終末の土坑墓群・17世紀中葉の儒墓など多くの貴重な成果が得られ、縄文～近世にかけて生活が営まれた遺跡であることが判ってきた。6年度に5,400㎡の調査を終えたのだが、家屋移転の関係上、一部の調査を平成7年度に持ち越していた。平成7年度奥谷南遺跡の調査は、平成7年12月20日～平成8年3月27日にかけて実施、調査面積は1,250㎡である。なお家屋移転が予定より遅れたため、未調査の部分が生じた。その地点（500㎡）については平成8年度に調査を行う予定となっている。

遺跡(地区)名	事業	調査面積	時代
奥谷南遺跡	本発掘調査事業	1,250㎡	旧石器・縄文・古代
神田地区	試掘調査事業	300㎡	弥生～中世
飛田坂本遺跡	〃	800㎡	縄文～中世
八田地区	〃	1,500㎡	縄文～近世
八田地区	本発掘調査事業	2,500㎡	縄文～近世
奥谷南遺跡	整理事業	平成6年度調査	縄文～近世
長畝古墳群	〃	〃	弥生～古墳
福井遺跡	〃	〃	縄文～中世

表1 平成7年度 四国横断自動車道関連調査事業（10・11次区間）

第Ⅱ章 地理的歴史的環境

奥谷南遺跡の所在する南国市は、高知県の中央部高知市に隣接した人口4万8千人の市で、高知平野の東部水田地帯の広がる平野部から四国山地へと連なる北部山地に至る南北に細長い地形的特徴を持つ。かつては県内でも有数の米の二期作地帯だったが、減反政策の影響もあり今では二期作は全く見られなくなってしまった。しかし現在でも、全国で最も早く米が収穫される早場米地帯の一つとして知られており、その温暖な気候を生かして冬期の園芸作物の生産も盛んに行われている。

旧石器～近世にかけての遺跡が分布する奥谷南遺跡に関連する周辺の遺跡を考えるためには、南国市北部に視点を限定せず高知平野東半に視野を広げ、遺跡の概観をすることとする。

旧石器時代の南四国、特に高知平野については、当遺跡の南約3kmの地点に位置する高間原古墳群の石室床面出土の細石核1点が知られるのみで、当時の様相は全くわかっていない状況である。縄文時代についても調査が行われた遺跡数は少なく、飼古岩陰遺跡（早期）・田村遺跡（後期）など数例が知られるにすぎなかったが、近年、松ノ木遺跡（本山町・前期～晩期）、林田シタノジ遺跡（土佐山田町・後晩期）、柳田遺跡（高知市・後晩期）、栄エ田遺跡（南国市・後晩期）等徐々に調査例が増えはじめ、実態が解明されつつある。

縄文から弥生への移行期、高知平野は非常に興味深い状況を示す。南国市田村遺跡群からは、弥生前期初頭の村が検出されている。縄文晩期土器を伴わない最古の遠賀川式土器が確認された遺跡の一つとして注目される。ただ、弥生時代前夜、縄文晩期突帯文土器期の高知平野の様相は、いくつかの遺跡から出土したわずかな土器以外には判っておらず、今後まとまった資料の出土が期待されている。田村遺跡群は前期から後期にわたって続く拠点集落と位置付けられる遺跡で、集落は地点を変えつつ連綿と営まれる。後期後半に至って集落は長岡台地上に進出する。土佐山田町ヒビノキ遺跡、ヒビノキサウジ遺跡、南国市金地遺跡、東崎遺跡など、技術上の制約もあって開発の及んでなかった長岡台地縁辺部に鉄器の普及とともに集落が急増してくる。同時に田村遺跡群では、急速に集落が衰退する。

古墳時代前期・中期の高知平野周辺は集落・古墳ともに実態が分かっていなかった。しかし、平成6年度四国横断自動車道建設に伴う長畝古墳群の調査により、弥生終末から古墳前期にかけての墓制の一端がわかりはじめた。弥生末～古墳時代初頭にかけて、急増した南四国中央部の人口もその後急減したのか、遺跡数自体も極めて少なくなる。古墳時代後期になってから遺跡数は増加に転じる。県下最大の古墳群である舟岩古墳群はじめ、小蓮古墳群（県下最大の小蓮古墳を含む）、蒲原山古墳群など一帯の丘陵に古墳群が形成される。平野部に島状に形成される独立丘陵にも高間原古墳群、明見彦山古墳群などことごとく古墳が築造され、南国市北部は当時の土佐・高知平野の中心地の一つといった様相を呈するようになる。

古代から中世にかけて当遺跡東方1～5kmのエリアは「土佐の中原」とでも称すべき地点で、各時期において中心となった遺跡を有する地域である。特に比江廃寺跡・土佐国分寺跡・土佐国府跡・岡豊城跡の各遺跡は、各々数次～10数次の発掘調査を経た高知県考古学史においても重要な遺

跡であり、注目すべき内容をもっている。当遺跡周辺も当然これらの遺跡の影響下にあったと考えられる。

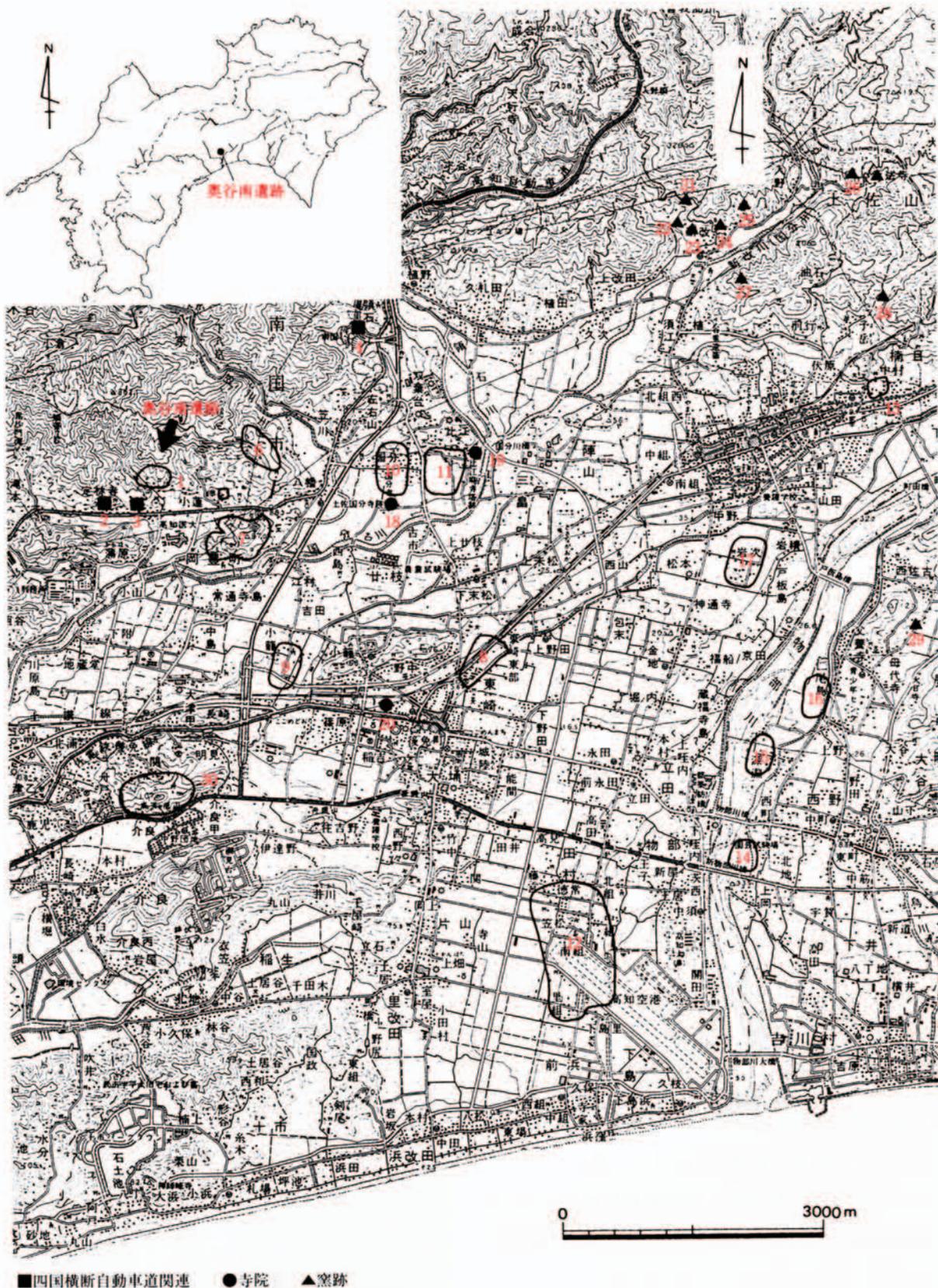
集落・墳墓・寺院・城跡など調査される遺跡の性格は様々である。近年の調査の増加により各々に調査成果が蓄積されているが、生産遺跡特に窯跡については調査例が少なく、発掘調査による実態の把握は十分ではない。(発掘調査例は少ないが、高知県全域の須恵器に視点を絞って、編年と窯跡の分布や調査状況について廣田典夫氏の精力的な研究『土佐の須恵器』によってまとめられている。)高知平野の窯跡は、良質な粘土の存在や燃料となる森林資源等に規定され、平野部東端の土佐山田町から野市町にかけて多く分布している。調査の行われた例として林ノ谷3号窯・西の谷1号窯の例が知られる。いずれも古墳時代から律令期(8世紀)の窯である。平安時代、律令制衰退期以降については野市町亀山窯の例などが報告されているが、発掘調査は行われておらず実態は不明である。

参考文献

1. 『南国市史 上巻』南国市史編纂委員会 1983
2. 森田尚宏『飼古屋岩陰遺跡』高知県教育委員会 1983
3. 出原恵三『松ノ木遺跡Ⅰ・Ⅱ』本山町教育委員会 1992
4. 前田光雄『松ノ木遺跡Ⅲ』本山町教育委員会 1993
5. 山崎正明『林田シタノジ遺跡Ⅱ』土佐山田町教育委員会 1993
6. 廣田佳久・池澤俊幸『長畝古墳群』高知県埋蔵文化財センター 1996
7. 森田尚宏・松田直則・岡本桂典『岡豊城跡1～5次調査』高知県教育委員会 1990
8. 出原恵三『比江廃寺跡発掘調査概報』高知県教育委員会 1991
9. 廣田典夫『土佐の須恵器』四国考古学叢書2 1991

No	遺跡名	種別	時期	No	遺跡名	種別	時期	No	遺跡名	種別	時期
1	奥谷南遺跡	集落跡・墓・生産遺跡他	旧石器～近世	11	土佐国府跡	官衙跡	弥生～中世	21	東谷窯跡群	窯跡	奈良～平安
2	長畝古墳群	古墳	弥生～古墳	12	田村遺跡群	集落跡	縄文～近世	22	西谷窯跡群	窯跡	奈良
3	栄エ田遺跡	集落跡	縄文～中世	13	ひびのきサウジ遺	集落跡	弥生～近世	23	小山田窯跡群	窯跡	古墳～奈良
4	口ミノヲ谷古墳	古墳	古墳	14	下ノ坪遺跡	集落跡	弥生～平安	24	林ノ谷窯跡群	窯跡	古墳～平安
5	小蓮古墳	古墳	古墳	15	深測遺跡	集落跡	縄文～近世	25	大谷古窯跡群	窯跡	奈良～平安
6	舟岩古墳群	古墳	古墳	16	深測北遺跡	集落跡	弥生～中世	26	大法寺窯跡群	窯跡	奈良～平安
7	岡豊城跡	城跡	中世	17	大領遺跡	散布地	古墳～中世	27	タンガン窯跡	窯跡	飛鳥
8	東崎遺跡	集落跡	弥生～中世	18	土佐国分寺跡	寺院跡	奈良・平安	28	予岳窯跡	窯跡	古墳
9	小籠遺跡	集落跡	弥生～近世	19	比江廃寺跡	寺院跡	白鳳・奈良	29	亀山窯跡	窯跡	平安
10	国分寺遺跡群	散布地	古墳～近世	20	野中廃寺跡	寺院跡	平安	30	高間原古墳群	古墳	旧石器・古墳

表2 周辺の主な遺跡一覧表



第1図 奥谷南遺跡位置図及び周辺の遺跡

第Ⅲ章 遺跡の概要及び平成6年度の調査

1. 遺跡の概要

奥谷南遺跡は、奥谷北遺跡とともに縄文時代の遺物散布地として知られている遺跡である。昭和40年頃、奥谷在住の植田速美氏が、家の改築中に石斧を一点発見した。昭和63年、氏が当時の高知女子大岡本健児教授にこの石斧の鑑定を依頼、これが縄文時代の石斧だと判り、植田氏邸付近が縄文時代の遺跡であることが確認された。この地点が奥谷南遺跡である。また、同時に谷奥のみかん畑開墾中に見つかった石斧も同時代であることが判った。その地点が奥谷北遺跡である。(石斧はともに磨製石斧で、乳棒状石斧と大型の伐採斧)

この奥谷南遺跡が、四国横断自動車道の計画路線に決定、平成5年度の確認調査の結果、従来知られていた縄文時代の遺物以外に弥生中期末・弥生後期末・古代(8世紀・10世紀)・近世(17世紀)の良好な遺物・遺構が確認された。それを受けて平成6年度に南東に開く谷間とその両側に展開する丘陵(尾根上及び斜面一帯)の調査を行った。

2. 調査区の設定

概要の項で述べたとおり、遺跡地は尾根の先端部とその尾根に挟まれた谷間、さらには谷を挟んで東側の尾根上へと広範囲に広がっている。地形的にも、各地点ごとの遺跡の性格も大きく異なるため、小区を設け、Ⅰ～Ⅵの調査区を設定した。各区の位置は、第2図のとおりである。調査区ごとの地形的特徴と遺跡の性格を簡単にまとめると以下のとおりになる。

Ⅰ区…遺跡地中央部に位置する標高40～60mの尾根先端部。弥生中期末の高地性集落が斜面一帯から、17世紀中葉の「儒墓」が頂部付近から検出された。

Ⅱ区…遺跡地西端の尾根頂部。弥生後期末の竪穴式石室墓を含む土坑墓・土器棺墓など7基の墓からなる墓群。弥生終末から古墳時代へと移行する時期の南四国中央部の墓制を考える上で重要。

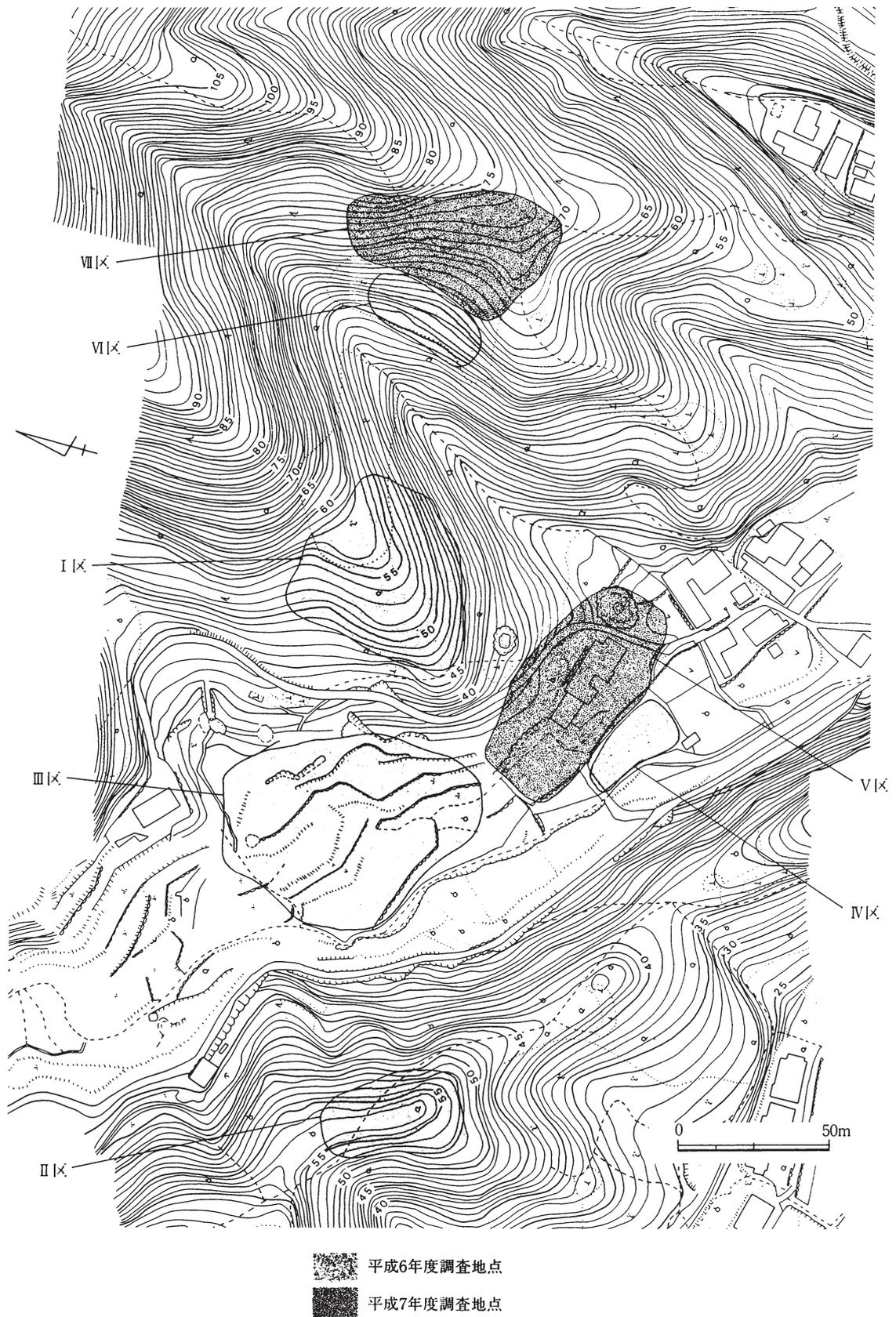
Ⅲ区…2つの尾根に挟まれた谷部一帯。縄文中期末の遺構面と堅果類貯蔵穴7基が確認された。

Ⅳ～Ⅴ区…岩陰遺跡及びその周辺と見られる地点。地形によって調査区を分けた。縄文土器・磨製石斧・叩き石が出土している。岩陰遺跡の調査は平成7年度以降の予定。

Ⅵ～Ⅶ区…遺跡地東端の標高60～90mの尾根及び斜面一帯。斜面を削り出して造られた平坦部の包含層中より10世紀の遺物がまとまって確認された。ここから猿投窯の陰刻花文緑釉陶器が出土している。高知県内では初めての出土であり、四国内においても香川・徳島で数例が知られるに過ぎない。



写真2 奥谷南遺跡航空写真



第2図 奥谷南遺跡調査区位置図

3. 平成6年度調査の概要

縄文時代

奥谷南遺跡に人の生活の痕跡が初めて記されるのは縄文時代前期のことである。(平成6年度調査の段階)ただし前期については土器の小片が数点出土したのみで、遺構は確認できなかった。Ⅲ区の谷部周辺から縄文時代中期末の土器群とともに、堅果類の貯蔵穴が7基検出された。堅果類は現在整理中だが、アカガシ・アラカシなどの種類が特定されており、貯蔵穴一基あたり100～500個の堅果が確認されている。堅果類の貯蔵穴は、調査区の中でも水の絶えることのない谷の低い部分に2列に並んで確認された。貯蔵穴は深さ60cm前後のものと深さ20cm程度のものの2つに分類できる。平面形は径60～100cmの円形あるいは楕円形であり、貯蔵穴中には直径10～20cm前後の礫が多く含まれていた。砂層と植物集中土層が交互に堆積し、その上に礫が載った状態で検出された貯蔵穴、あるいは貯蔵穴中に礫が集中して含まれるものなど様々な形態を示している。

貯蔵穴の西側、微高地上に縄文の遺構面が形成されていた。ピットが谷の落ち際に並んで検出され、遺構内及びその上面の包含層中からは、縄文中期後半～中期末の土器が出土している。包含層中には石鏃・叩き石・磨製石斧・石錘など石器類も土器とともに確認されており、住居址である可能性もあるが後世の削平を受けた部分も多く断定は出来ない。(作業場的な何らかの生活領域であったと思われる。)



写真3 縄文中期末貯蔵穴群

縄文時代の遺物はⅢ区以外にⅣ区・Ⅴ区からも確認されており、縄文の生活領域は遺跡地の谷部全域に広がっていたと推定できる。また、谷奥北には遺物の散布する緩斜面が広がっており、この地点が居住空間として利用されていたのではないかと想定している。



写真4 縄文土器出土状況



写真5 貯蔵穴

弥生時代

弥生時代の遺構としては、I区斜面全域に広がる中期末の高地性集落とII区の尾根上に造られた弥生後期末の集団墓が検出されている。

I区の集落は標高45m～60mの斜面を中心に展開している。竪穴住居が4棟、段状遺構と呼ばれる掘立柱を持つ建物跡が4棟、調査区の関係上一部のみの調査であったため断定は出来ないが住居跡の可能性の強い遺構が3棟、計11棟の建物跡が検出されている。建物間をつなぐ通路の役割を果たしたと推定される遺構も2ヶ所確認されており、急な部分では約30度の傾斜を持つ斜面一帯が集落の生活空間として利用されて



写真6 高地性集落

ていた。遺構から出土する土器は弥生中期末を中心とする時期のもので遺構間の時期差は明確ではないが、遺構の密度・建物の建て替えの痕跡から判断すると、調査地内には一時期に5棟前後の建物が存在していたようである。高速道路の予定地外にも居住に適した緩斜面が残っており、当遺跡では当時10棟前後の建物を有する集落が営まれていたと推定できる。この集落は、麓との比高差は30m程度であり、立地状況から弥生の高地性集落と考えられる。

高知県内の高地性集落は現在24ヶ所確認されている。このうち幡多郡大月町ムクリ山遺跡・伊野町バーガ森北斜面遺跡・本川村鷹ノ巣遺跡・南国市狭間遺跡・野市町本村遺跡については発掘調査が実施されており、鷹ノ巣遺跡（高山性集落と位置づけられる）以外はいずれも弥生中期後半～後期初頭に機能していた高地性集落である。



写真7 竪穴式石室墓

谷の西側尾根頂部付近（標高56～58m）には、6基の土坑墓と1基の土器棺墓が造られている。土坑墓から出土している土器はすべて南四国の弥生後期末のヒビノキⅡ式土器である。土坑墓はその方向から2つの墓群に分けられる。周辺の平野を見下ろす位置に立地していること、そして各土坑墓に約20～200個の礫を伴うことから、一般の集落成員とは異なる集落の中心となるグループを葬った「集団墓」だと考えられる。土坑墓の中で一基は、土坑の周囲に砂岩・チャート・石灰を詰めて石室を意識した造りになっており、「竪穴式石室墓」の範疇で捉えられるも



写真8 土坑墓

のである。

他地方の例と比較すると粗雑な造りではあるが、その影響下にある墓制だと考えられ注目される。今回の集団墓の調査により、調査例の少ない南四国の弥生終末の墓制を解明する上で貴重な資料が得られた。

近世

谷東側尾根頂部付近からは、17世紀中頃の儒墓が確認された。儒墓とは儒教の教えに則って造られた墓で、土佐では17世紀中頃盛んにつくられる。今回確認された儒墓は一辺2.6mの方形の土坑墓で、2段掘りになっており、地表から1.5m下から一辺1m深さ50cmの穴が掘られている。この穴の中に唐津焼の甕（中型甕）が鉢（二彩唐津）で蓋をされた状態で横倒しになって埋められていた。甕には人骨が付着しており、鑑定の結果、土葬で乳児の骨であるということが判った。昭和63年、今回の調査地点から数m北で石盤に刻まれた墓誌が見つっている。墓誌の中に、承応元年（1652年）9月1日に誕生し9月5日に亡くなった乳児についての記載がある。甕に付着した人骨はこの乳児のもので推定され、儒墓は土葬であるということが裏付けられる結果となった。遺物も17世紀前半のものであり、墓誌の年号と一致する。儒墓の調査は全国的にも珍しく、墓の構造を知る上でも貴重な調査となった。

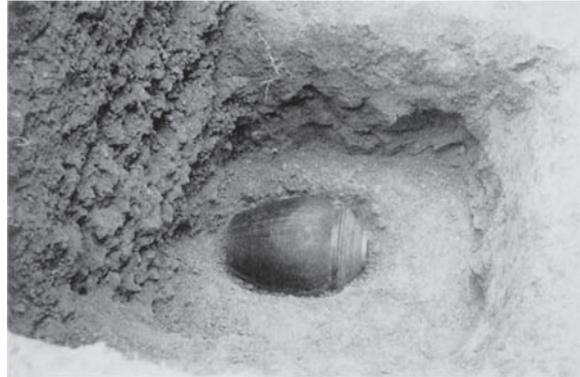


写真9 儒墓・甕棺出土状況



写真10 甕棺（唐津焼・甕と鉢）

参考文献

1. 前田光雄「高知県」『中・四国縄文中期土器集成』中四国縄文研究会 1993
2. 『季刊考古学50号-縄文時代の新展開』雄山閣 1995
3. 小野忠熙編『高地性集落跡の研究-資料編-』学生社 1979
4. 坂本憲昭『野市町本村遺跡』野市町教育委員会 1993
5. 前田光雄「ムクリ山遺跡」『高知県大月町 竜ヶ迫遺跡ムクリ山遺跡』大月町教育委員会 1994
6. 出原恵三『西分増井遺跡群』春野町教育委員会 1990
7. 森清治『鳴門市埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』鳴門市教育委員会 1994
8. 廣田佳久・池澤俊幸『長畝古墳群』高知県埋蔵文化財センター 1996
9. 岡本健児「儒墓と墓誌」『ものがたり考古学』高知県文化財団 1994



写真11 I区弥生中期末住居跡



写真12 I区調査風景

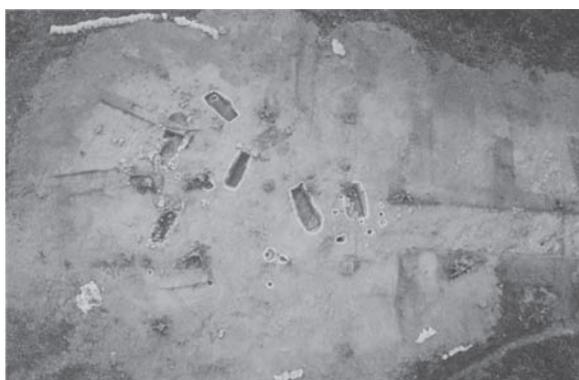


写真13 II区土坑墓群



写真14 II区遠景（後方の尾根が長畝古墳群）



写真15 III区貯蔵穴調査風景



写真16 II区尾根上よりI・III区をのぞむ



写真17 IV・V区遠景



写真18 VI区陰刻花文緑釉陶器出土状況

平成6年度調査

第Ⅳ章 平成7年度・調査の概要

1. 調査の方法

工事による影響の考えられる部分について全面発掘調査を行った。遺物包含層及び遺構面の上面に後世に崩落した礫混じり粘質土層が堆積していたため、包含層上面まで重機により掘削、それより下層については人力によって調査を進めた。

Ⅶ区については、斜面の方向に即して任意に4 mグリッドを設定、工事区域内に設定されている公共座標から、グリッドの公共座標を測り込んだ。Ⅴ区については公共座標の座標軸に即して4 mグリッドを設定して調査を行う。

Ⅶ区では、当初尾根西斜面中腹の平坦面のみを遺構面と想定していたために、平坦面の遺構検出・調査を中心に進めていた。ところが遺構面周辺の斜面部についてトレンチを設定、土層堆積状況を確認する中で、遺物集中部（斜面堆積）及び窯跡と見られる遺構を検出したため、尾根上も含めた斜面一帯を対象とした調査になった。

2. 出土遺物・検出遺構

検出した遺構・遺物を調査区ごとに調査の進行を追ってⅦ区・Ⅴ区の順に列挙する。

Ⅶ区

(1) 出土遺物

須恵器・土師器

緑釉陶器

白磁（Ⅱ類・Ⅳ類）

青磁（龍泉窯系青磁Ⅰ-2・4類）

布目瓦（平瓦・丸瓦-玉縁）

他



写真19 山岳寺院遺構面調査風景

(2) 検出遺構

山岳寺院関連遺構

堀立柱建物跡3棟

土坑2基（うち1基に埋甕）

火葬墓1基

生産関連遺構面（土師器・須恵器）

土師器焼成土坑5基

ロストル構造を持つ須恵器窯跡

通路状遺構

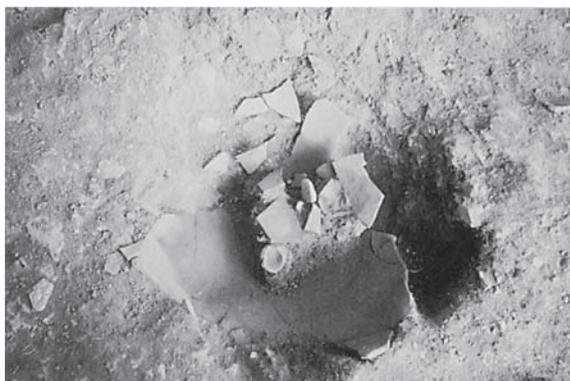


写真20 遺物出土状況（須恵器埋甕）

V区

(1) 出土遺物

1. 旧石器時代

マイクロコア (チャート)

エンドスクレイパー (チャート)

石器剥片 (珪質頁岩・チャート)

2. 縄文時代

縄文土器 (前期初頭・中期後半)

石器剥片 (チャート・サヌカイト)

石器

石鏃

スクレイパー

叩き石

磨製石斧

盤状剥片 (サヌカイト)

3. 古代

須恵器 (10世紀)

4. 近世以降

陶器 (唐津・能茶山)

磁器 (国産・産地不明)

(2) 検出遺構

1. 旧石器時代～縄文時代

岩陰遺構 2ヶ所…石器製作跡

土坑1基

2.

堀立柱建物跡3棟

柱穴50基

土坑1基

溝一条



写真21 遺構検出状況



写真22 近世遺構面



写真23 旧石器時代遺物出土地点

第V章 平成7年度 調査の成果

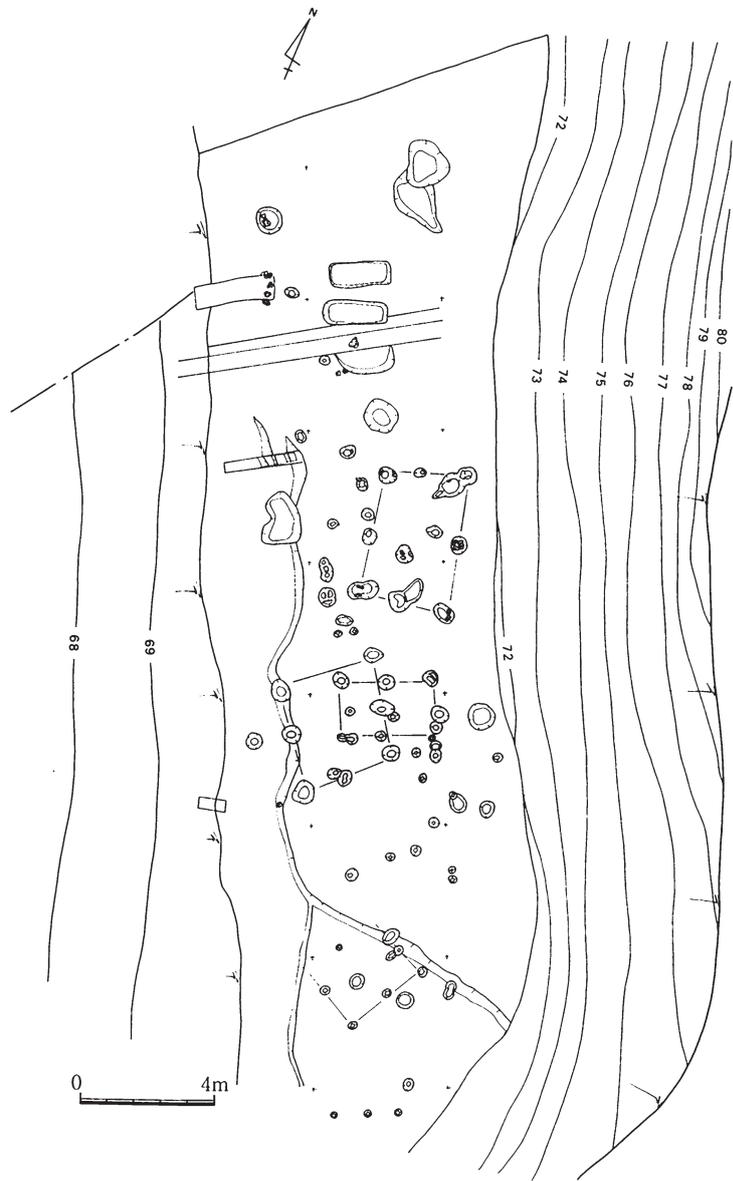
1. VII区

(1) 山岳寺院関連遺構

9世紀末から12世紀にかけて機能していたとみられる寺院関連遺構を確認した。標高60mから80mにかけての急な斜面を削り出し埋め立てて、幅10~20m・奥行き70~80mの平坦地をつくり出し、その上で生活を営んだ形跡・遺構を検出した。出土した遺物から、この平坦部が形成されたのは9世紀末~10世紀初頭頃のことだと考えられる。

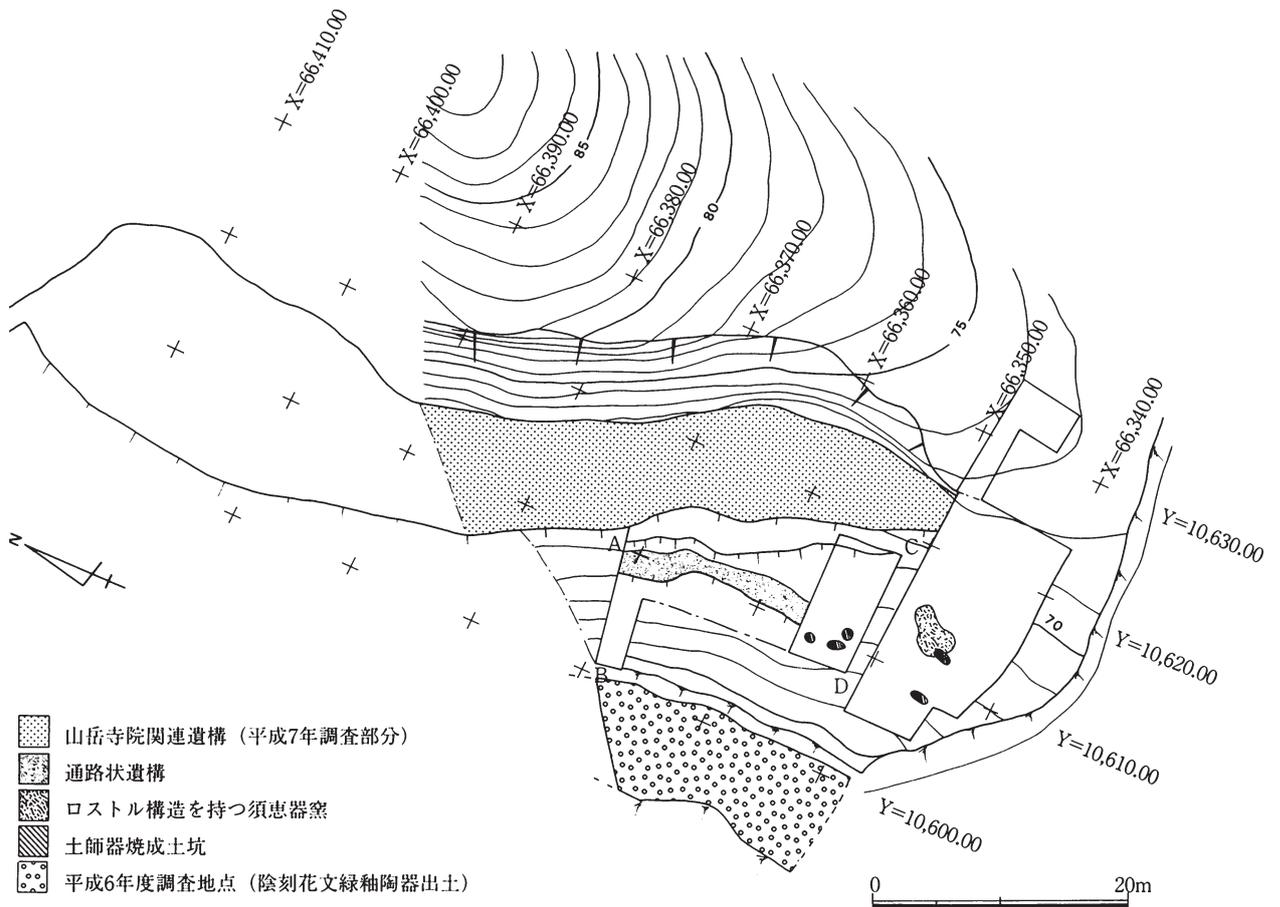
この平坦部の下方から緑釉陶器の段皿が確認された。愛知県猿投窯で焼かれたもので、K-90（黒笹90号窯）の段階であり陰刻花文を持つ。この陰刻花文緑釉陶器は、それ自体高級品である緑釉陶器の中でも貴重なものであり、国衙・郡衙クラスの官衙あるいは寺院以外にはほとんど出土例がない。この地点（山地の中腹）が官衙である可能性は低く、寺院がある可能性を考えて周辺の調査を行っていた。

今回、遺構（2間×2間の掘立柱建物跡）が確認されたこと、そして遺構内を含め周辺から一定量の瓦（平安時代）が検出されたことから、今回の調査地点周辺に古代の山岳寺院が存在した可能性が高い。このような山中に立地する寺院は山岳寺院・山寺などと呼ばれ、静岡県湖西市大知婆峠廃寺の継続的な調査など最近全国的に調査例が増えている。文献・伝承の全く残っていない例も多い。平安時代以降、真言宗・天台宗の密教系寺院が本格的に山中に進出するようになる。これら古代の山岳寺院は9世紀後半から10世紀にかけて成立した例が多い。当遺跡も例外でなく、12世紀まで存続し、そ

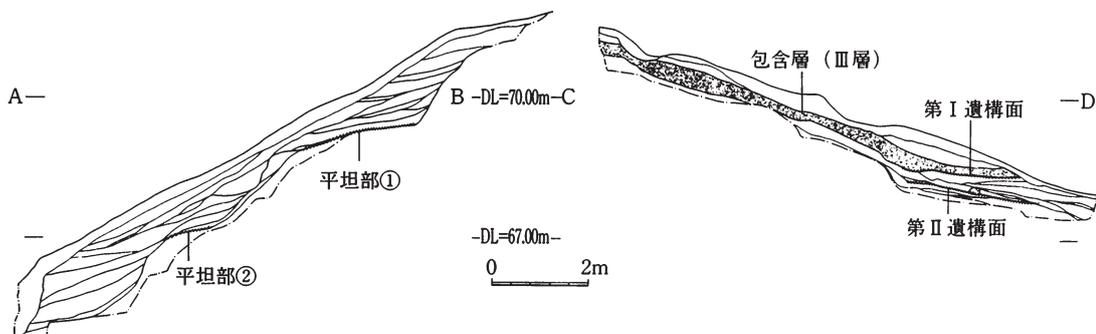


第3図 山岳寺院関連遺構面

れ以降姿を消すという状況も似通っている。9世紀末～10世紀初頭という時期は日本の歴史上の画期であり、それまでの律令国家から王朝国家へと移行した時期で、古代社会及び経済の諸側面に多くの変化が見られる。民衆支配形態も負名制に代表されるように変質し、国司の在り方も全く違ったものとなる。山岳寺院も、これらの社会の変容とは無縁でありえず、王朝国家体制下の政治・社会状況に規定された存在だったと考えらる。



第4図 VII区遺構配置図



第5図 斜面北端セクション (A-B) 及び中央バンク北壁セクション (C-D)

県内の山岳寺院の例は高知市蓮台寺・竹林寺などに知られている。高知市北部標高200～300mの山中にあったとされる蓮台寺の場合は、天曆10年（956）という鐘が造られた年が、銘文の拓本の模写により確認されているのみで、その実態は分かっていない。高知県で発掘調査によってその存在が明らかになった山岳寺院の例は今回の奥谷南遺跡の例が初めてである。

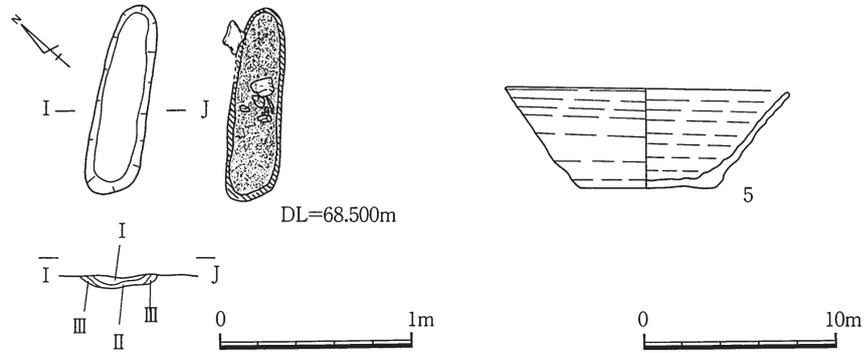
文献・伝承ともに遺跡地周辺に山岳寺院の存在を示す資料は、現段階では確認されておらず全くない可能性もあるが、残された痕跡（地名・文献・伝承）の追及が今後の研究課題である。



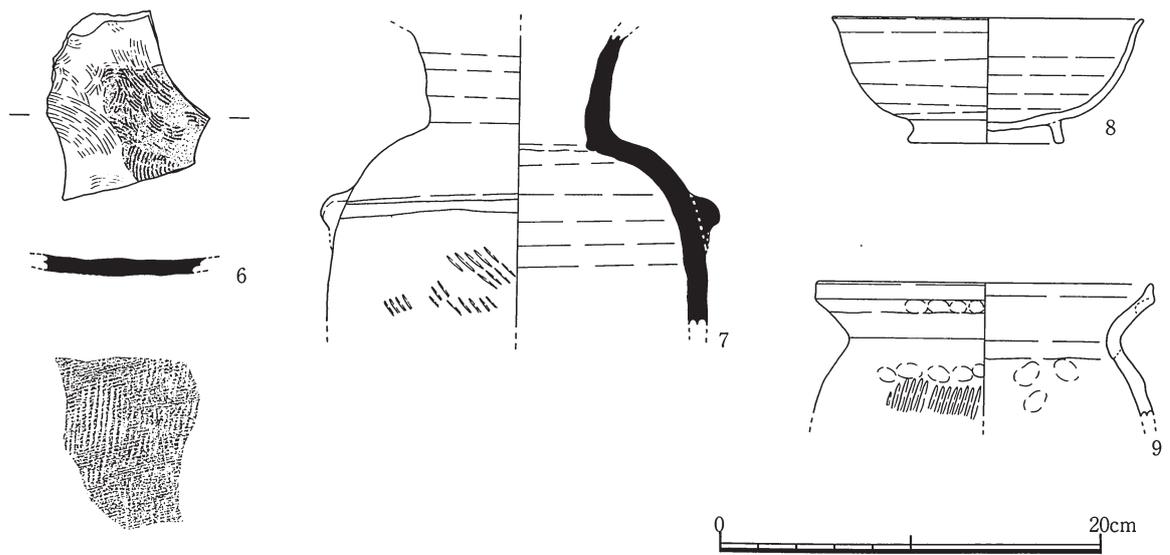
第6図 VII区出土遺物（瓦）



写真24 土師器焼成土坑 (S K-17)



第7図 SK-17平面図・断面図及び出土遺物



第8図 VII区斜面包含層(III層)出土遺物

6-須恵器転用硯 7-須恵器双耳壺 8-防長系土師器椀 9-土師器甕

(2) ロストル構造を持つ須恵器窯

窯跡は山岳寺院遺構面の南側斜面に近接して構築されている。規模は第11図（P.21）の通りで、2条の火床と2本の分焰柱を持つ地下式平窯であり、地山粘土を掘り残すことによって、火床・分焰柱・焚口の構造など焼成部・燃烧部の基本的な構造をつくり出している。焼成部の天井は崩れ落ちており、焼成部上面が明赤褐色粘土によって覆われていた。この粘土中から熱による変成を受けていない割り石が規則的に並んで検出された。窯の天井については残存していなかったため、崩れ落ちたと考えられる部分から推定するしかないが、他遺跡の調査例から見ても1.5～2m程度の高さは持っていたと想定できる。製品の出し入れは、焼成部上面の天井部側壁から行っていたと考えられ、規則的に並んで検出された割り石は、この側壁を支えるため側壁の粘土中に塗り込まれたものであったと推定している。実測図面と整理作業を通じて、どのように窯の側壁あるいは天井部が崩れ落ちていったのかを明らかにしていきたい。

燃烧部外側に土手状の高まりが築かれている。窯を密閉する用途あるいは窯の中から灰を掻き出した時に一時的に溜めておく部分だったのか、土（粘土）をしっかりと叩き締めて造り上げられている。この「土手状の高まり」の内側、焚口にも灰層と焼土層が層上に重なり合って堆積しているが、どの層も明褐色・黒色（黒褐色）・暗赤褐色のいずれかに分類可能な色調を呈したものであり、還元焰焼成を受けて、灰色・暗灰色・暗オリーブ灰色などに発色した部分は見られない。

窯の内部は、燃烧部・焼成部の区別なく一様に還元焰焼成を受けたことを示す色調（暗灰色・暗オリーブ灰色など）に発色しているのだが、分焰柱下半とその周辺の窯壁面そして焚口床面焼土層は例外的に酸化焰焼成を受けたと思われる色調（明褐色・暗赤褐色）に発色しているのである。このことは、どのような形で窯の密閉が行われたのかを端的に示していると思うのだが詳しい分析は報告書で行いたい。

この窯に伴う灰原は、窯の南西側直径4m四方に広がっている。灰層は全部で4層確認できた。窯の焼成部・燃烧部及び灰原から出土する遺物はいずれも供膳具を中心とする須恵器である。出土遺物の詳細な検討を加えていないため、現段階では灰層ごとの違いに言及することは出来ないが、灰層間の時期差はほとんどないものと考えられる。これら窯出土の須恵器はヒビノキサウジ遺跡（香美郡土佐山田町）SE-1出土の須恵器に形態上は類似し、底部が糸切り（ヒビノキサウジ）に対してヘラ切り（奥谷南遺跡）という違いがある。窯出土遺物はヒビノキサウジ遺跡のSE-1出土須恵器の時期（10世紀後半）よりも若干古い年代を示しており、この窯は10世紀中頃から後半にかけて機能したものと判断される。

なお、この灰原のさらに下層から、炭化物を含む層が明褐色粘土層を挟んで確認された。灰原の炭化物集中黒色土層とは明らかに異なる層で、炭化物の量も少ないが、この層を除去した後に隅丸長方形のプランを持つ土坑が検出された。平面プランや深さは異なるが、「周囲が被熱して赤褐色に発色し、床面に敷き詰めたような炭化物層を持つ」という共通の特徴を持つ土坑が、周辺から全部で5基確認された。この土坑は窯を構成する土手状の高まりを取り除いた下からも検出されている。

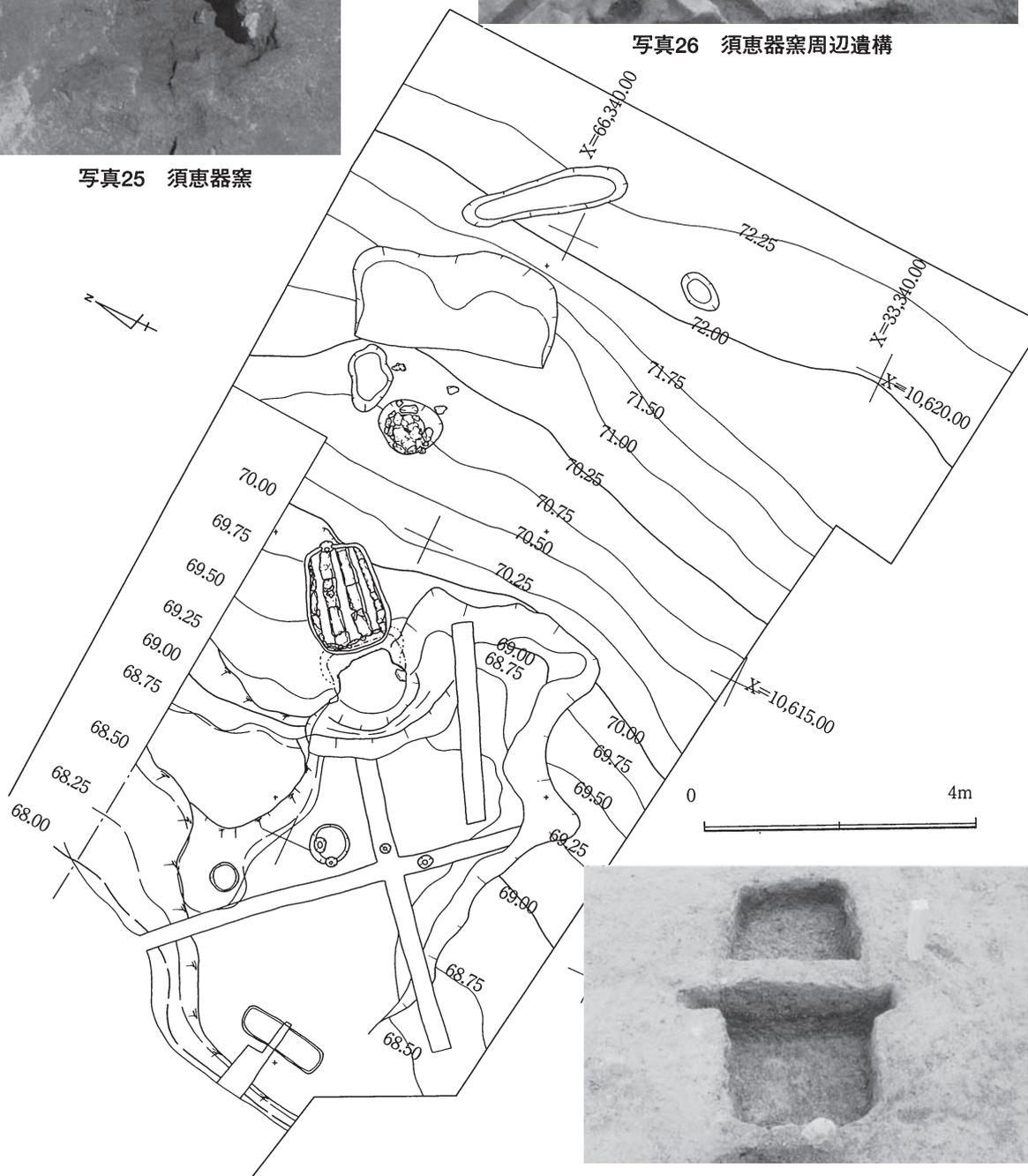
これらの土坑は出土遺物もほとんどなく、その性格が何であるのか、現段階では断定できない。炭窯・火葬場ではないかとのご教示も頂いたが長軸1m前後と規模が小さい。残されていた少量の



写真25 須恵器窯



写真26 須恵器窯周辺遺構



第9図 窯跡周辺遺構 (S=1/100)

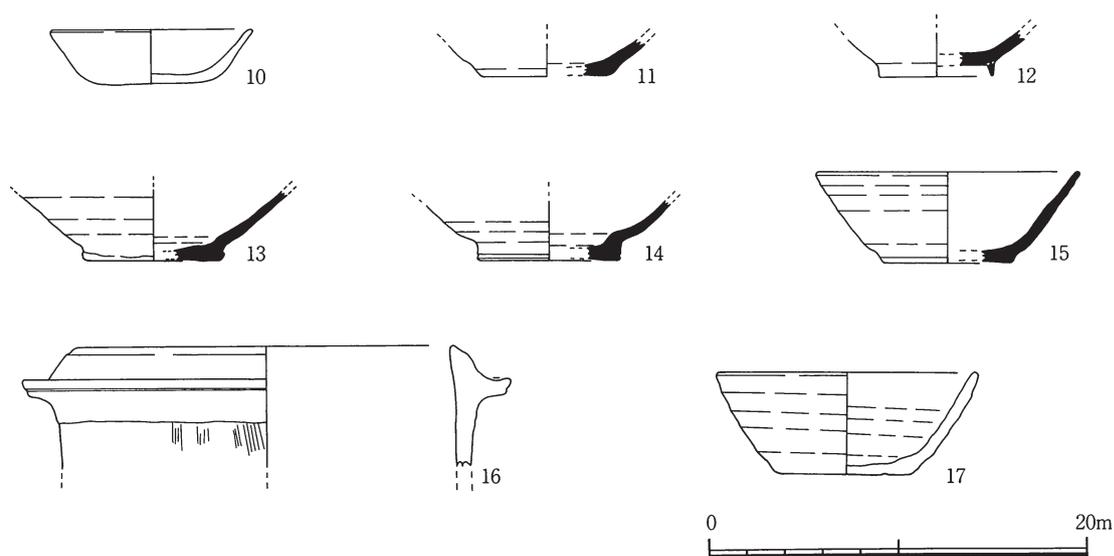


写真27 土師器焼成土坑 (S K-11)

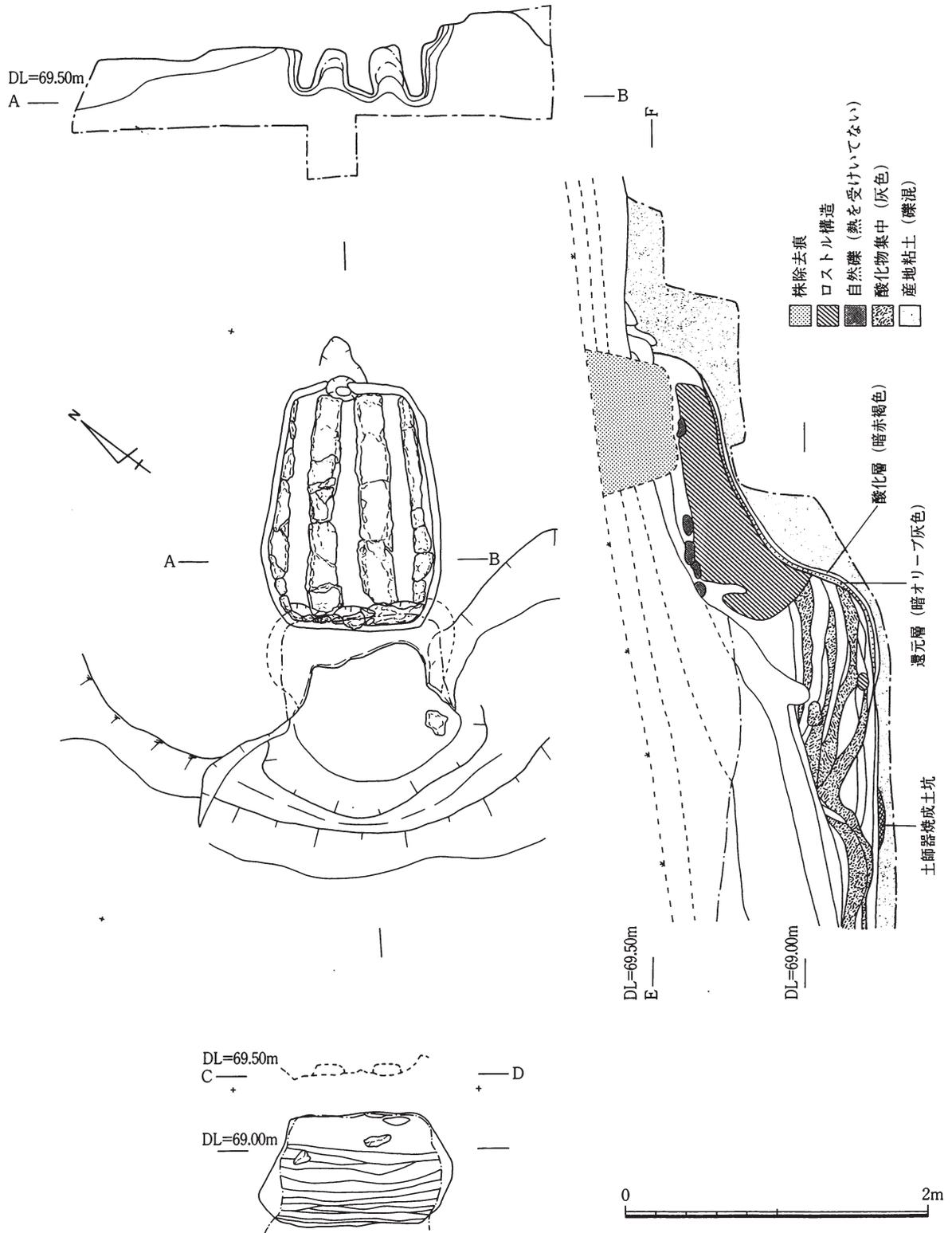
土師器と、遺構の存在する平坦部がその後須恵器窯として利用されていること等からこれらの小土坑は「土師器焼成土坑」ではないかと現時点で考えている。この地点は、須恵器の窯を構築する以前は土師器の焼成をする作業場であった可能性が高い。出土した土師器は10世紀前半のものであり窯出土須恵器（10世紀後半）と時間的な整合性もある。

山岳寺院遺構面の下方斜面包含層中より、この窯あるいは土師器焼成土坑で焼かれたと想定される遺物がまとまって出土している。遺物の時期から考えても遺跡の立地的にも、これらの生産遺構群が山岳寺院に伴うものである可能性は高い。

ロストル構造を持つ窯を構築できる技術者を招聘し、当時的高级品であった猿投窯の緑釉陶器・篠窯の鉢・楠葉の黒色土器を使用し、急峻な山腹を造成して10~20m×70~80mの平坦地をつくり出す勢力が、この土佐にも律令体制の枠外に存在していた。それはいかなる勢力であったのか。整理の過程を通じて少しでもその具体像に迫ることが出来れば、と考える。



第10図 灰原出土遺物



第11図 窯体実測図 (S=1/40)

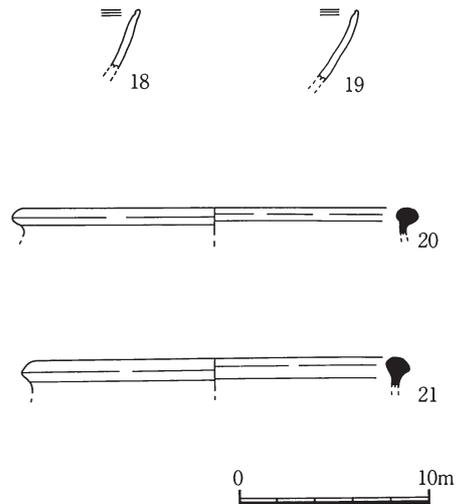
(3) 出土遺物に関する若干の補足

京都府篠窯出土須恵器鉢の口縁部が現在のところ2点出土してる。いずれも伊能編年の日期に相当する。時期は10世紀前半（第1四半期）及び中葉で、県内出土篠鉢の中では最も古く、この時期のものが出土したという点でも注目される。なお高知県内で篠鉢が出土している遺跡は、官衙関連であるなど特別な性格を持った遺跡ばかりである。これらの遺跡では緑釉陶器・黒色土器・篠鉢の3点が必ずセットとなって出土しており、奥谷南遺跡も例外ではない。県内で篠鉢が出土している遺跡は、アゾノ遺跡（中村市）、船戸遺跡（中村市）、下ノ坪遺跡（香美郡野市町）に次いで4遺跡目となる。

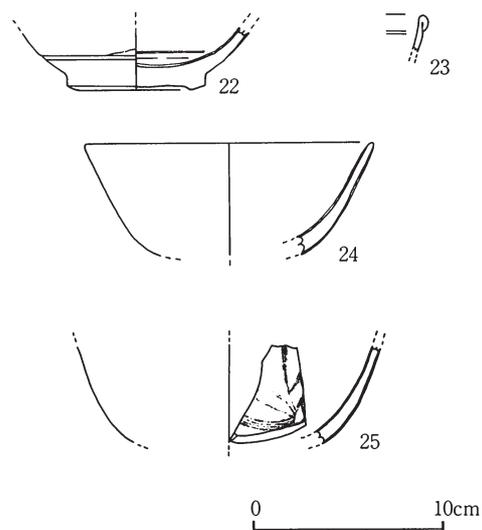
黒色土器は在地産のもの及び畿内産のものが斜面包含層中より出土している。楠葉の黒色土器B類も確認された。楠葉の黒色土器は、県内では深淵北遺跡（野市町）に出土例が知られるのみである。また、在地産の黒色土器B類の内面にコテアテが観察される例が確認された。（太宰府市教育委員会の中島恒次郎氏のご教示による。氏によれば、コテアテは太宰府から発生した技法ではなく、瀬戸内など各地にみられる「伝統的技法」であるという。土佐でも土佐山田町ヒビノキサウジ遺跡SE-1出土黒色土器の多くから観察される。SE-1出土資料では、須恵器の内面にもコテアテが確認された。珍しい例である。）

斜面削り出し遺構面の遺構中及び斜面包含層中からは瓦片が出土している。合計でも数十点と量的にはさほど多くないが瓦葺の建物の存在を推定させるには十分な量の瓦が出土している。

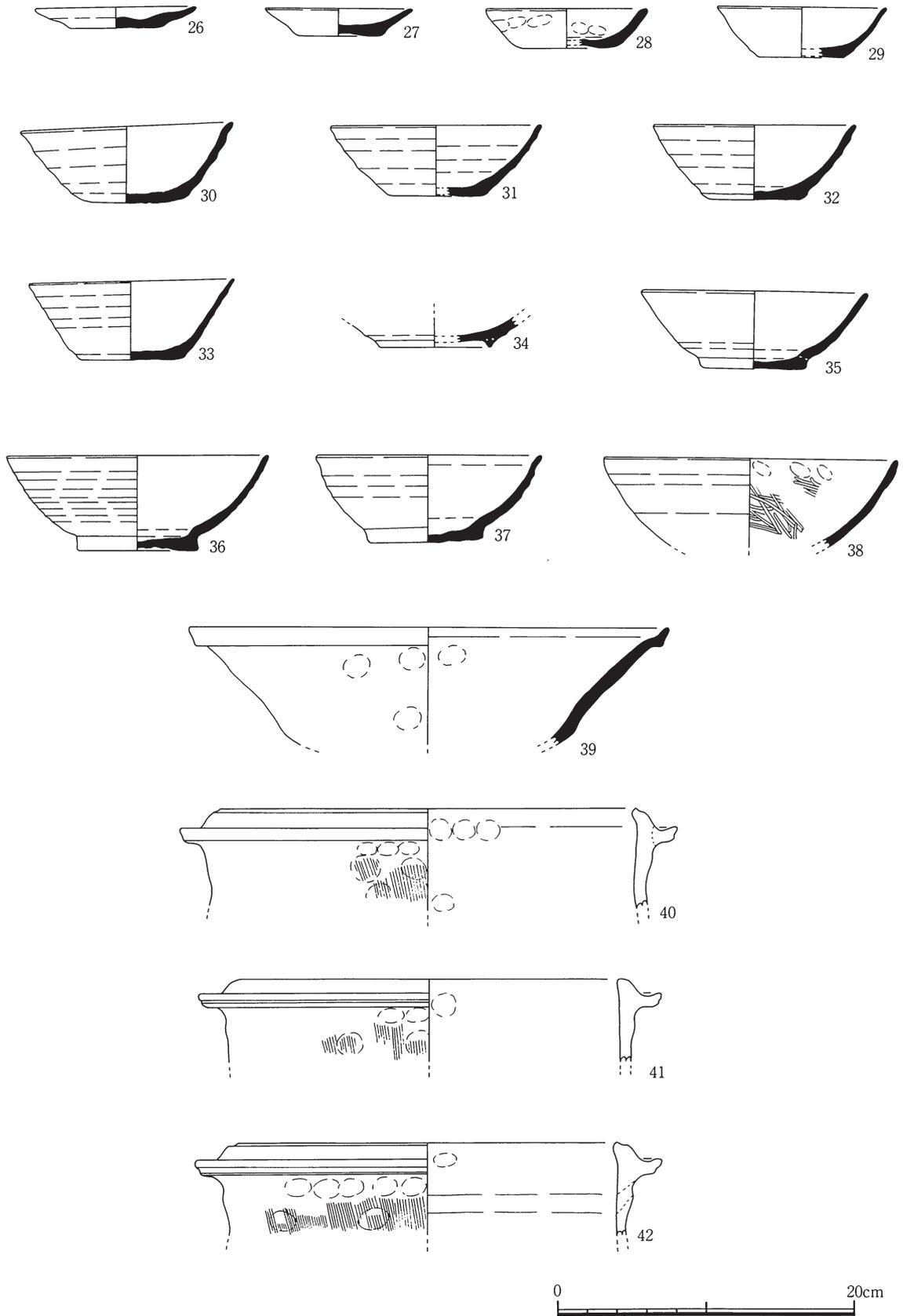
斜面包含層より、製塩土器が確認された。塩の流通に関するいわゆるⅡ類土器であり、内面の布目圧痕よりこのⅡ類土器と同類の製塩土器であると判断した。幡多郡大方町宮崎遺跡などに報告例が見られ、現在調査中の香美郡野市町下ノ坪遺跡からも大量に製塩土器が出土している。森田勉氏の研究「焼塩壺考」によるとこれらのⅡ類製塩土器を基本的に焼塩壺と分類、形態により3類に分けているのであるが、出土したものは氏の分類による焼塩壺のⅡ類である。ただいずれも破片であり量的にも少なく、内面の布目と器壁の厚さのみを手がかりにして判断したため、今後の検討が必要である。



第12図 VII区包含層（Ⅲ層）出土遺物
18・19 畿内産黒色土器B類（楠葉）
20・21 篠窯須恵器（鉢）



第13図 山岳寺院関連遺構面出土遺物
22・23白磁 24・25龍泉窯系青磁



第14図 窯跡（焼成部）出土遺物

遺跡の存続時期を決定する遺物として、龍泉窯青磁 I-2a 類と I-4 類が出土している。それ以降の時期を示す遺物は確認されておらず、現段階で、遺跡の機能していた時期は12世紀後半～13世紀初頭までと判断している。なお最近の調査例の増加に伴い従来のヒアタスが埋まりつつある土佐の古代～中世にかけての土師器編年（松田直則氏等による）に照らし合わせてみると、今回出土した土師器で最も古いものは10世紀初頭という年代が与えられるもので、当遺跡の山岳寺院は10世紀初頭から13世紀初頭にかけて約300年の間機能していたものだと考えられる。

参考文献

1. 橋本久和『中世土器研究序論』真陽社 1992
2. 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 中世土器研究会編 1995
3. 藤井直正「山岳寺院」『仏教考古学講座第2巻－寺院－』雄山閣 1984
4. 後藤建一『大知婆峠廃寺』『大知婆峠廃寺跡Ⅱ～Ⅳ』静岡県湖西市教育委員会 1990～1993
5. 勝山清次「収取体系の転換」『岩波講座 通論日本史 古代5』岩波講座 1995
6. 岡本健児「幻の寺・蓮台寺」『ものがたり考古学』高知県文化財団 1994
7. 高橋啓明『ひびのきサウジ遺跡』土佐山田町教育委員会 1990
8. 伊野近富「篠窯原型と陶呂窯原型の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報第37号』1990
9. 松田直則『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 風指遺跡アゾノ遺跡』高知県教育委員会 1989
10. 松田直則『中村宿毛道路埋蔵文化財調査概報Ⅱ 船戸遺跡』1994
11. 池澤俊幸『平成7年度 下ノ坪遺跡概要報告』野市町教育委員会 1996
12. 吉成承三・佐竹寛『深淵北遺跡』野市町教育委員会 1996
13. 山崎純男『海の中道遺跡 福岡市埋蔵文化財調査報告書第87集』福岡市教育委員会 1982
14. 森田勉「焼塩壺考」1982『太宰府陶磁器研究－森田勉氏遺稿集・追悼論文集－』 1995
15. 松田直則「土佐における古代末から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究』 1989

2. V区

家屋移転の関係で、2月26日から調査を開始したため、本年度は予定面積1,000㎡のうち500㎡のみの調査にとどまった。残り500㎡については平成8年度に調査を行う予定である。

ここは、家屋改築時に磨製石斧の出土した場所であり、当遺跡が遺跡として最初に確認された地点である。住居の建っていた地点には元々巨大な岩（幅10m、長さ12m、高さ10m程度の大きさ。植田速美氏の談話と岩の残存状況から推定。）があったのだが、戦後、1kmほど南を流れる国分川の改修に利用するために、根元から割って取り除いたらしい。植田氏によると、その岩は東側に現在残っている岩の1.5～2倍の大きさで、岩の南側は庇状に迫り出し、雨もしのげるような状況であったという。この地点を岩陰遺跡と想定して、現代の埋め立て土を除去した後、トレンチを5箇所設定、堆積土層を確認の上、層ごとに掘り下げていった。

(1) 縄文時代の岩陰遺跡

その結果、岩陰想定部の南側は1.5～2.5mの深さで埋め立てられていることが判り、この埋め立て土の下層、黄褐色地山直上に少なくとも4時期の遺構面を検出した。遺構検出面は戦前まで畑として利用されていた場所だが、遺物包含層はほとんど残っていない。遺構出土遺物も少なかったが、縄文時代の土坑（石器剥片・石鏃・縄文土器小片一条痕を確認）や堀立柱建物（近世）等が確認されている。

また、岩陰想定地点には落盤層とみられる層があり、この層を中心に縄文土器・石器剥片・石鏃など縄文時代の遺物を検出した。土器は破片が多く、条痕の存在によって縄文土器であると確認できるものが多い。時期判定可能な資料もあり、前期初頭及び中期後半の2時期に生活が営まれていたと考えている。

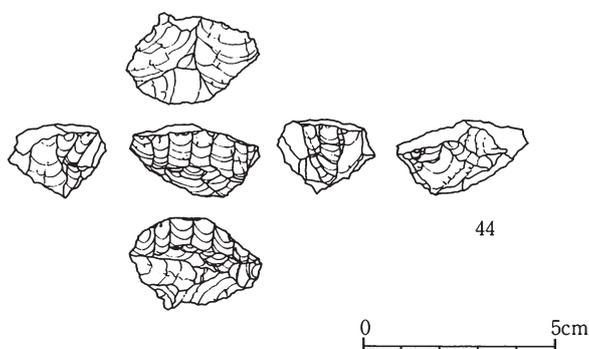
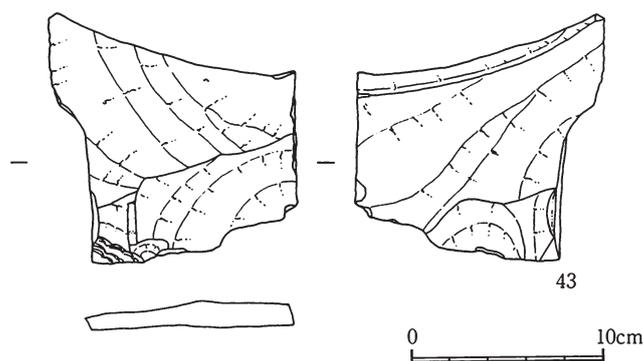
第14図-35はサヌカイトの盤状剥片である。現段階では高知平野最大であり、石器素材であるサヌカイトのこれだけ大きい剥片がまだ利用可能な部分を多く残したまま残るということは、この盤状剥片を所有する集団が何らかの事件・事故に巻き込まれてこれを放棄せざるを得なくなったのか、あるいはこの地点にすっかり忘れてしまったのか、いずれにせよこの岩陰で半定住生活を送っていたのは間違いない。岩陰想定地点には落盤層の拡がり確認されており、落盤に巻き込まれた可能性もある。

また岩陰と想定される部分は、西側の落盤層を伴う岩陰（現在は岩自体消失）と東側の現存する岩の下部の2地点である。西側（岩陰①）は先述のように落盤層中に縄文前期・中期の遺物が含まれている。東側（岩陰②）にはチャート剥片の散在する石器集中地点が確認されており、石器製作址の可能性が強いが、その中心部分は平成8年度の調査予定地であり来年度の調査に期待したい。

(2) 旧石器時代の遺物確認

岩陰（西側）の落盤層の下層の遺物の有無を確認するためトレンチを設定、50cm前後の厚さを持つ黒色土層を掘り抜いた下層、褐色粘質土層（Ⅷ層）中から石器剥片（珪質頁岩・チャート）、エンドスクレイパー（チャート）、マイクロコア（細石核-チャート）が確認された。旧石器時代終末約1万3,000～2,000年前の遺物であり、高知平野周辺では、高知市大津高間原古墳出土の細石核以来2例目となった。高知平野周辺では縄文時代の実態についても近年の発掘調査を通じて徐々に解明されつつある段階である。高知平野で旧石器時代の遺物が層位を確認された上で出土したのは初めてのことで、旧石器時代に当地で明らかに生活が営まれていた証拠が確認されたという点で、その意義は大きい。

本年度はトレンチ調査により、一部のみ旧石器の層を確認したにすぎず、奥谷南遺跡の旧石器時代の生活の実態解明は平成8年度の調査に持ち越された。8年度の調査結果を待ち、詳細な報告は8年度調査で遺跡の概要が判った段階で行いたい。



第15図 V区出土遺物
43サヌカイト盤状剥片 44チャート細石核

写真28
山岳寺院関連遺構（南から）



写真29
遺構面から平野部をのぞむ



写真30
斜面部の通路状遺構



Ⅵ区-2



写真31
山岳寺院関連遺構面遺物出土
状況



写真32
斜面部調査風景



写真33
窯焼成部検出状況

写真34
窯焼成部調査風景



写真35
窯焼成部測量風景



写真36
窯周辺遺構



Ⅵ区-4



写真37
窯焼成部完掘状況



写真38
窯焼成部遺物出土状況



写真39
斜面より平野部をのぞむ

写真40
窯全景



写真41
窯周辺遺構（西より）



写真42
窯周辺遺構（上方より）



Ⅵ区-6



写真43
窯断ち割り状況（横方向）



写真44
窯断ち割り状況（正面）



写真45
ロストル構造を持つ須恵器窯
（完掘）

写真46
調査前遠景



写真47
1号岩陰（現存しない岩陰）
調査風景



写真48
近世遺構面



V区-2



写真49
現存する巨岩（2号岩陰）



写真50
近世遺構面と1号岩陰（東から）



写真51
落盤による岩石群（チャート）

四国横断自動車道（南国～伊野）建設に伴う

平成7年度 奥谷南遺跡発掘調査概報

1996年3月

編集 (財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター

発行 高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 0888-64-0671

印刷 共和印刷株式会社